

■研修終了報告

2015年8月 JGA 第一支部「日本刀剣」～鑑賞のツボと技術研修見学～

JGA 第一支部運営委員会

猛暑が急に和らいだ去る8月25日と28日に（一社）日本観光通訳協会（JGA）第一支部による「日本刀剣」研修が行われました。この研修は公益財団法人日本美術刀剣保存協会のご厚意で、同協会が年1回実施している＜研磨＞と＜外装制作＞の各技術研修を、間近に見学し、研修生や講師と直接お話が出来る大変貴重な機会であり、今年で6回目を迎えます。

講師は刀剣博物館学芸員でたたら課長の黒滝哲哉先生。最初に博物館をご案内いただき、展示物の解説、鑑賞のツボ、刀剣についての説明を伺いました。次いで、25日は＜研磨＞、28日には＜外装制作＞の技術研修を見学、最後に刀剣の材料となる玉鋼を製造するためのたたら製鉄のレクチャーを受けました。25日は14名、28日は8名が参加しました。

黒滝先生によると昨今の日本刀ブームにより、半年ほど前から同博物館の入場者が急増し、状況が激変しているそうです。以前は年配の男性が多かったが、外国人と若い女性が増えているので、現在の専門用語多用のパネルの解説とは別に、一般の人にもわかりやすい解説を検討中とのこと。参加者からは、ガイドならではの刀剣の登録証や実際に購入できる場所に関する質問、または時代の流れと刀の長さの変遷、地鉄（じがね）・刃紋や、太刀と刀の違いなど、活発な質問がありました。

技術研修は、徒弟制度の維持が困難な今の時代、伝統技術の継承のために実施しているもので、8月の研修は研師（とぎし）、白銀師（しろがねし）、鞘師（さやし）、柄巻師（つかまきし）に必要な技術習得が目的です。

25日は作務衣姿の研修生達が裸足で研磨を行っており、スコットランドやロシアからの研修生、また研磨の講師で国宝級と関係者から噂される方に、直接お話が聞けました。独特の座り方でまず座れるようになるのに3年かかるというものすごい世界です。実際におっかなびっくり、濡れたような艶の制作中の刀を持たせてもらい、参加者は大喜びでした。



28日は、外装の制作を見学しました。刀身の保護と安全のためにはなくてはならない鍔（はばき）、刀身を保存するための白鞘、刀剣の使用上、また見た目上も大切な柄（つか）巻きです。先生から、技術研修の目的を伺い、また、柄巻きの講師からは材料を作る職人さんや材料を扱う人が居なくなっていることを伺い、さらにたたら製鉄の存続には環境保全が不可欠とのお話から、日本の伝統的なものづくりは、環境を含め、大きな輪（＝和）によって成り立っていること、そのどれが欠けても存続が難しいこと、そして今は多くの伝統が衰退の危機にあることが実感できました。

技術研修を見学し、直接研修生や講師の方々からお話を伺うことで、博物館の展示を観るだけではわからない、深い世界や難しい現実に触れることが出来、非常に有意義な研修でした。